

考えが何もまとまらずに一日が終わってしまった、ということはありませんか？仕事に、家庭に、遊び等々。あれもやりたい、これもやりたい。だけど、あれもやらなきゃ、これもやらなきゃ……。矢継ぎ早に飛び込んで来る予定達に翻弄されながら、今日は何をしていたのだろうと夕方に考える。そうなる理由は様々ですが、少し自分に無理をさせ過ぎてはいないでしょうか。

一日の時間は限られています。また、自分で解決できる物事の量も限られています。未解決の悩みが借金の様に積み上がっていくことで、仕事の処理能力に影響が出たり、家庭では大切な家族に八つ当たりしてしまったり。

「物事を解決することができない」ことは、認知症の方が、不安や混乱をしてしまう理由の一つかもしれません。意思決定の支援として、成年後見制度があります。今のうちに様々な制度を知ったり、家族と相談しておくなど、自分に無理をさせないための備えをしていきませんか。

私たちはここにいます！

認知症地域支援推進員配置施設

- 利根町地域包括支援センター ☎68-2211
- 利根町保健福祉センター ☎68-8291
- 複合施設 響 ☎61-8500
- 介護老人保健施設もえぎ野 ☎84-6081



「プラごみ問題」 その4
今回は、「パッケージ」のお話です。

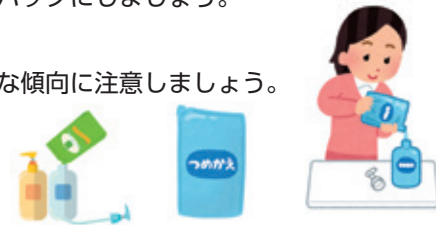
みなさんは、商品選びの基準がありますか？プラスチックごみ削減のために企業も試行錯誤を重ねています。容器包装の簡略化などが「見た目」からの購買意欲に影響する場合がありますが、その目的を正しく理解して商品選びに生かしましょう。

【実践しよう!!】

日々の商品選びを見直そう。●簡易包装の商品を選ぼう。●2回目からは詰め替えパックにしましょう。

【ここに注目!】

- 買い物するとき、つい「中身よりも外見」に左右されることがあります。次のような傾向に注意しましょう。
- 同じ値段なら見た目がよいパッケージの商品を選びがちになる。
- 食品であれば過剰包装といわれるくらいが衛生的で品質も保てると思う。
- 過剰包装による付加価値に魅力を感じる。



シルバー人材センターだより 町民の皆様とともに 26年!

利根町シルバー人材センターは、高齢者が働くことを通じて生きがいを得るとともに、地域社会の美化活性化に貢献する一般社団法人です。当センターでは、利根町在住の60歳以上の方が会員登録できます。会員となった方は、ご自身のライフスタイルに合わせて元気に働いています。剪定・伐採・除草はもとより、清掃・家事支援・障子張替・施設管理・ゴルフ練習場運営などを行っています。

人生100年時代と言われる中、いきいきと働く会員さんたちの仕事を少しでも知っていただくため、簡単にご紹介させていただきます。今回は、利根親水公園でのお仕事です。草刈り、古代ハスの手入れ、清掃、剪定、トイレ清掃、薬剤散布を行っておりますが、皆様に気持ちよくご利用していただくために、年間を通して仕事に励んでおります。



古代ハスの手入れ



人生
いきいきと

草取りなどを行う松松さん
「やりがいとやる気を持って、今シルバー青春真っ只中！」



清掃担当、柿原さん「毎日が充実していて活力になってます」
柴田さん「自分の健康のため頑張っています。あと何年できるか楽しみです」



男女平等って大人だけの問題なの？

子どもは大人のマネをして学んでいく

良くも悪くも、子どもは大人のマネをします。大人が気づかないうちに、子どもは大人の行動やしぐさ、言葉、表現、役割をマネして学んでいきます。そのようにして学んだことは、子どもが成長していく中で自ら取捨選択をしていくことではありますが、大人が子どもに与える影響はとて大きいのです。



無意識の思い込みは無意識に次の世代へ受け継がれていく...

性別の違いによって無意識に抱く役割や行動、考え方、見た目などのイメージを、ジェンダー(社会的性差)と言います。「女の子なんだからそんなことしないで」「男の子は泣かないの」と、子どもの頃に言われたことがある方もいるのではないのでしょうか。このような言葉に、「なんで女の子はだめなの?」「なんで男の子は泣いちゃだめなの?」と違和感を抱いた方もいれば、無意識に自分の子どもや孫にも同じことを言っている方もいるかもしれません。

このような「男らしさ・女らしさ」に関する思い込みは、固定的な性別役割分担を生み出し、それらは私たちの生きざらさへと繋がります。そして、それらが、子どもの世代・孫の世代、次の世代へと継承され続けると、さらに固定的な性別役割分担が助長される、という悪循環を生み出します。

例えば家庭において、料理や洗濯を母親だけがしている姿を子どもが見ていると、「家事は女性がやるものだ」と子どもは無意識に思い込んでしまうことがあります。そして子どもが成長し、自ら家庭を持った際に、「女性が家事をするのはあたりまえ」という考え方からなかなか抜けられず、家庭での役割分担を同じように行ってしまう、ということがあるのです。

世界から学ぶ、価値観を押し付けない子どもとの関わり

ノルウェーの学校では、叱るよりも褒めて伸ばす文化と言われています。子どもを厳しくしかりつけたり「子どもはこうあるべき」というように価値観を押し付ける接し方はしません。大人たちは相手を承認し、一人ひとりの個性を否定せずに接するようにしています。

なりたい職業についても、女の子が野球選手や大工になりたいと言ったり、男の子がお花屋さんや保育士になりたいと言っても、先生や親は「女の子だから、男の子だから〇〇にはなれないよ」という発言はせずに、本人が今やりたいことを大切にしようとするような接し方をしています。

子ども時代は貴重な時期 ジェンダーをどう伝える？

幼い子どもは、性別の概念もあいまいで、先入観がないので自分の好きなものを自由に選べる時期です。しかし、この時期に周囲の大人が「男らしさ・女らしさ」の価値観を押し付けてしまうと、子どもはジェンダー差を素直に受け入れてしまいます。子どもに対して、ジェンダー平等を意識して接することで、子どもたちが自分らしさを尊重できる環境づくりに繋がっていきます。

これからの日本を支えていくのは大人達だけではなく、子どもたちも未来を担っていきます。私たちの未来や社会がジェンダー平等で性別に関係なく個性や能力を発揮できる世の中になるかどうかは、大人たちの子どもへの接し方で変わっていくのです。

● 問い合わせ先 政策企画課 政策企画係 ☎68-2211 (内線338)